

一八八三年十二月二十二日(土)

ドゥキネーシヨル
南神村で信者たちと共に——バララームの父、その他

今日は土曜日で、キリスト暦一八八三年十二月二十二日である。今、時間は九時ころだ。バララームの父親が来ていた。ラカール、ハリシユ、校長、ラトウはここにずっと泊まっている。シャームプクルのデベンドラ・ゴーシユが来ている。聖ラーマクリシユナは、南東のベランダで信者たちといっしょに坐っておられる。

一人が質問した——「どのようになれば信仰を身につけることができますでしょうか？」

すると聖ラーマクリシユナは、バララームの父をはじめ信者たちに向かつておっしゃった——「前へ進め！ 七つの門の向こうに王様はいらっしゃる。門をみな通り抜けたら王様に会えるよ。

チャナクのアナプルナ像の開眼式するとき(1874年)、わたしはドゥワラカさんにこう言ったよ——『大きな湖の水底には大きな魚がいる。エサを落としてやると、そのエサの匂いに引かれて大きな魚は浮かんでくる。時々しぶきも上げる。愛と信仰がエサだよ』

〔聖ラーマクリシユナと化身の原理〕

「神様は人間として活動なさる。人間の姿に化身なさるのだ。聖クリシュナや、ラーマや、チャイタニヤ様チャイトニヤのようにね。

わたしはケーシヤブ・センにこう言ったよ。人間の中にあの御方はとてもよく現れていらつしやる。畑のあぜ道には小さい穴があいていて、皆はそれを「グティ」と言っている。「グティ」に水がたまつて、小魚やエビガニなんかがわいている。魚やエビガニを見つけようと思えば、その「グティ」の中を探せばいいんだ。神様を見つけたければ、その化身たちの中を探せばいい。

この十四シア（約170cm）の人間の中に宇宙の大実母マタは現れていらつしやるのだ。歌にあるだろう。

シャーマ母さま 玩具おもちゃを作り

十四シアの 玩具のなかで

ゆかいな遊びを してみせる

あなたは玩具の なかにいて

たくみな糸で あやつるが

玩具はそれを 知らないで

自分で動くと思つている

シャーマ——カーリーの愛称、黒色の意

神を知りたいと思つたら——神の化身に会いたいと思つたら、霊の修行をする必要がある。湖には

大きな大きな魚がいるが、エサを投げ込まなけりや。牛乳の中にはバターがあるけれど、凝こらせてかきまわさなけりやならん。カラシ種たねには油が含まれているが、種をお押しつぶさないと油はとれない。ヘナは手を赤く染めるけど、ひいて粉にしなけりやね」

〔無形の神フラス(梵)フラスに達する修行と聖ラーマクリシュナ〕

一信者「あの御方は形があるのですか、それとも形がないのですか？」

聖ラーマクリシュナ「まア待つとくれ。先ずカルカッタに行きさえすれば、どこにマイダン通りがあるか、アジア協会はどこか、ベンガル銀行はどこか、だんだんわかってくるよ！

コロダのバラモン地区に行くためには、先ずコロダに行かなけりやならん。

無形の神をさとする修行ができないことはない。だが、とてつもなく難しいんだ。女と金をすつかり捨てきらなければできないんだよ！ 形の上でも心の中でも捨てなければ——。俗心の痕跡あとでも残つていれば、ダメなんだ。

形ある神に対する修行はやさしい。でもまあ、それほどやさしくもないがね。

無形の神への修行や智慧のヨーガの話パクを信仰者クの前ではいけない。苦勞してやっと信仰を芽生えさせたのに、すべて夢幻だなんて言つたら、せつかくの信仰を傷つけることになる。

カビール・ダースは無形の神を信奉していた。シヴァやカーリーやクリシュナなんか認めなかつた。カビール・ダースはいつも言つていたそうだ——『カーリーはお米やバナナを召し上がる。クリシュ

ナは牛飼乙女ゴリビたちの手拍子にあわせて猿踊りをなさる」と（一同笑う）。

無形の神の修行者は、きつと先ずはじめに十本腕の神を見るかもしれないね。その次に四本腕の神。その次に二本腕のゴパール（幼児クリシュナ）。さいごに何ともいいようのない光を見て、それに溶けこんでしまう。

ダツタトレイヤやジャダバーラタはブラフマンを見たあと、もう戻ってこなかった。そういうこともある。

また、こんなことも言われているよ——シユカデーヴァは、あのブラフマンの大海の水を一滴だけ味わって、海のとどろき波のうねりを見たり聞いたりなすった。でも、海の中にはお入りにならなかつた、と。

ある修行僧ブラフマチャリが、ケダル峰ナート（ヒマラヤの峰でヒンドゥー教徒の巡礼地の一つ）の向こうに行くからだと肉体を保つことができない、と言っていた。

そんなふううに、ブラフマン智を成就したあとは肉体を保っていることはできない。二十一日で滅びてしまう。

高い壁の向こうに涯はそしない草原がある。四人の仲間が、壁の向こうに何があるか見ようととして一生懸命になっていた。ひとりひとり壁をよじ登って向こうを見て、アハハと大笑いして向こう側に落ちてしまった。そうして三人までが何の報告もしなかった。あとの一人だけ下りてきて報告した。ブラフマン智を得たあとでも肉体を残しておくのは、人びとを導くためだ。神アヴァタールの化身たちのようにね。

ヒマラヤの家にパールヴァティはお生まれになった。そして、父のヒマラヤ王にご自分のいろいろな相すがたをお見せになった。ヒマラヤ王はこう言った——『マーはいろんな姿をみな見せてくれたが、でもあなたにはもう一つブラフマンの相すがたがある筈だ。こんどはそれを見せておくれ』パールヴァティはお答えになった——『パパ(お父さん)、もしあなたがブラフマン智を求めているなら、世間を捨てて聖者や修行者たちの仲間に入らなければなりません』

ヒマラヤ王があくまで言い張ったので、パールヴァティはその相すがたをお見せになった。見たとたん王は氣を失ってしまった」

〔聖ラーマクリシュナと信仰のヨーガ〕

「いま話したことはみな、智識分別の領分だよ。ブラフマンは真実在で世界は虚仮、という分別だ。みーんな、マボロシなんだとさ！ とてつもなく難しい道だね。この道では、神の活動も幻でまちがい、ということになってしまふ。その上、そう言ってる、ウタシ、まで無いことになる。この道では神アッアッラの化身なんでも勿論認めない。全く難しいねえ。こういう智識の話を、信仰者バクダはあまり聞かない方がいい。

だから、神は人間に化身して、信仰を教えてくださるんだよ。全部すべてまかせろ、と言つてくださる。信仰をもっていれば、あの御方のお恵みですべてが成就出来るんだからね。智慧さとも大悟とも、みんなだ。

あの御方はいろいろ活動リイフなさるが——あの御方は自分の信者たちに属しているんだよ。

しがない玩具おもちゃ(人間)の信仰のヒモで、大実母ママよ、あなたは縛られて！

あるときは神が磁石におなりで、信者が針になる。またあるときは信者が磁石になって、あの御方が針におなりだ。信者があの御方を引きつけるんだよ。あの御方は信者思いだから、信者に支配されてしまうんだ。

また、こんな説もある。ヤシヨーダー(クリシュナの養母)やプリンダーヴァンの牛飼乙女ゴウビたちは、前世で無形の神の信奉者だった。あの人たちはそれでちっとも楽しくなく満足感もなかった。だから、生まれ更かわったとき、プリンダーヴァンでのクリシュナの遊戯リョウに入つて歓喜を味わったのだ、と。ある日クリシュナが、『お前たちに永遠の都を見せてやるから、さあヤムナー河に水浴びに行こう』とおっしゃった。皆が行つて河に浸ると、たちまちゴローカ(クリシュナの永遠の住居)が見えた。そして、その後で何ともいいような全き光が見えた。そのとき養母ヤシヨーダーは言った——『クリシュナや、もうこんなものは見たいと思わないよ。今はお前のその人間の姿を見ていたい。お前を抱いたり食べさせてやつたりしたいから——』

神アツタの化身に、あの御方は最もよく顕れている。化身が肉体をもっている間は、その御方を礼拝供養しなければいけない。

あれ あの 秘密のお住居すまい

夜明けとなれば身をかくす

神の化身を、すべての人が見分けられるわけではないよ。肉体をまとつてゐるから、普通の人と同じように病氣もするし、悲しみも、飢えも、渴きも、みなあるんだ。わたしらと同じように、ものを思つたり考えたりもする。ラーマもシーターのために泣いた。

〳五大のワナに捕らえられ 梵天ブラマーさえも悶え泣くだよ。(訳註、五大——五つの粗大元素^ブ地、水、火、風、虚空) プラーナにあるが、ヒラニヤークシャが殺された後でも、猪しし(ヴァラーハ)に化身した神グは満足げにエサを召し上がっていらつしゃつたそうだ。子どもに乳を飲ませておやりになつたり——(皆笑う)。天の都のことを思い出しもなさらなかつた。とうとうしびれを切らしたシヴァ大神が、三叉の鋒ほこで猪の体を刺し殺したら、あの御方は、〳アハハハハと大声で笑いながら天の都にお戻りになつた」

聖ラーマクリシュナ、バヴァナート、ラカール、モニ、ラトウたちと共に

午後になつてからバヴァナートが来た。部屋にはラカール、校長、ハリシユたちがいる。

聖ラーマクリシュナはバヴァナートたちに向かつておつしやる——

「神の化身を愛したら、それで充分だ。アー、あのゴービーたちの愛！」

こう話されて、ゴービーたちの氣持ちそのままを表情にあらわしながら歌をおうたいになる——

一、シャーマ(クリシュナ)よ、君はわが命の命

二、わたしは家に帰らない クリシュナの名、言えぬ家など――

三、あの日私は戸口に立って、森に行く友を見つめていた

遊んでいる最中に聖クリシュナが姿をかくすと、ゴープーたちは気違いのようになった。木を見ては、『お前は苦行者さんね。きつとクリシュナを見たでしょう！ そうでなけりや、どうして身動きもせず三昧に入ったように立っているの？』と言った。若草の生い茂った大地を見ては、『ねえ、野原さん、お前はきつとあの御方を見たでしょう。そうでなけりや、どうして髪を逆立てているの？ あの御方に触さわられた歓びを楽しんでいるにちがいない』と言った。そして又、マドヴィーの蔦つたを見ると、『あ、マドヴィー、私にマードヴァア(クリシュナの別名)をおくれ！』と言った。ゴープーたちは、神聖な愛に酔いしれていたんだよ！

アクルーラ(クリシュナの叔父)が来ると、聖クリシュナとバララーマ(クリシュナの兄)はマトウラーに行くために彼の馬車にお乗りになった。そのときゴープーたちは、車輪にしがみついて行かせまいとした」

こうおっしゃって、聖ラーマクリシュナはまた歌をおうたいになった。

つかむな　つかむな　この車

馬車は車で動くのか！

車を動かすのは神さまよ

神の車で世界は進む！

聖ラーマクリシユナはおっしゃった。——「馬車は車で動くのか」という文句がわたしは大好きだ。その車で大宇宙がまわるんだよ！　乗ってる主人の命令のままに、御者はどこへでも走らせるんだよ」